

Title	生活の地平と風景：奥井復太郎の景観論
Sub Title	
Author	山岸, 健(Yamagishi, Takeshi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1997
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.2 (1997.) ,p.45- 50
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集II: 奥井復太郎の都市論
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19970000-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

生活の地平と風景

奥井復太郎の景観論

山岸 健

都市を社会的景観として理解した研究者、彼こそ奥井復太郎である。ジョン・ラスキン～ドイツ中世都市～シカゴ学派、自分自身の研究歴をこのように要約した彼は、絵画的光景や風景／景観に強い関心を示した人だった。鋭い眼光は彼の風貌と表情において忘れたいものである。

人びとの暮らしの姿、生活環境の様相、風景や景観、生活者、人間―都市研究者、奥井復太郎の〈まなざし〉は、人間と日常的世界に注がれていたのである。彼の生涯にわたる研究業績は豊かな生活感覚と生活感情によって貫かれているが、そうした研究業績と多様な仕事を展望するとき、私たちの視野にクローズ・アップされてくる注目に価するモチーフがある。それが景観であり、風景である。奥井復太郎の都市研究は、日常生活研究の地平に花開いたまことにみごとな眺めであることに注目したいと思う。景観論、風景論という観点から、また、そのようなパースペクティヴ（遠近・眺望・視野）で奥井の都市研究を理解することもできる。広く知られている『現代大都市論』には明らかに独自の景観論という趣がうかがわれる。景観や風景へのアプローチにおいて、奥井の面目躍如といえるのではないだろうか。人びとの生活様相や地域の景観にたいして眼光の人の目は広く見開かれていたのである。彼の都市研究の出発点に姿を見せていたのは、景観や風景である。また、そうした研究の帰着するところにいつも姿を現わしていたものこそ、生活の風景であり、生活景観なのである。

「都市研究の基本的課題―日本都市学会大会によせて―」と題されたエッセーのなかで奥井は都市研究の方法における中心項目として、土地・人口・産業（活動）・文化（様式）・時代という五項目を指摘している。このエッセーのなかで彼はつぎのように述べている（「都市研究の基本的課題―日本都市学会大会によせて―」『都市問題』第45巻第5号 昭和29年5月、7ページ、『奥井復太郎著作集 第七巻 都市論（五）〔戦後都市論・都市と文学〕』監修 川合隆男／山岸 健／藤田弘夫、大空社、1996年12月29日、所収）。

結局は、「そこにおいて、どういう人間が何をどういう風に行って生活しているか」ということを根幹にして、どんな構造、どんな関係、どんな過程、どんな性格が生まれてくるかという点に、主たる着眼点があるべきである。

人間の生活（様相）、生活者の姿に奥井の〈まなざし〉が注がれている。彼は時代的制約にも注目しているが、こうした制約を視野に入れたうえで、地域と人間と生活を一体的に考察する必要性が主張されたのである。このエッセーには生活基盤、生活体制、生活信条といった奥井のキー・ワードがうかがわれる。社会学のパースペクティヴに考慮がはらわれながら、都市研究をめぐってさまざまな提言が試みられたのである。奥井復太郎の都市研究においては、ことごとく生活であり、人間なのである。さらにことごとく生活景観なのである。

若き日の奥井の姿が私たちの眼前に浮かび上がってくるようなシーンを眺めたいと思う。ドイツ留学時（大正13年－昭和2年）を回想して書かれた文章である（「都市研究への一回想」『都市問題研究』第11巻第2号 昭和34年2月、『奥井復太郎著作集 第七巻』所収）。

独逸滞在中は、都市研究に関する限り独逸中世都市の魅力に圧倒された。それ故経済史研究には全く専門外でありながら、それらの文献を矢鱈に求めた。ただ中世都市といっても私の興味の中心となったのはその形体であり建築であり且つ設計であった。ここに都市計画に対する後年の私の関係が生れて来る。勿論その以前田園都市論に関して目をつけた事もあったが、中世都市は本当に素晴しかった。廻らされた城壁と城門、その裡にぎっしり建てこまれた家屋、中央に聳える教会とその尖塔、ラート・ハウス、その前面にひろがるプラッツ、等は、それらいちいちの建築についてでなく、コンパクトな集団生活の形体として、これあるかなの感を十分に与えてくれた。ここにコミュニティがあるという啓示であった。この感得が前掲ラスキンの直接の影響であったのはいうまでもない。勿論それは私の内面的な関係においてである。教会の塔は何故天に向ってかくも高いかという質問に対してラスキンは、それは人々の神に対する渴仰のゆえにと答える。生命と摂理、そして生けるもののより高いものに対する精進とそのための闘争、そうした事から生れる形体に於ける調和、そういうものとして自然美を謳うラスキンの観察解釈がそのまま、私の中世都市観になったといって差支えなかった。同時に今日なお、これが後段で触れるが私の総合観の基底になっている事も否めぬことである。

ドイツ中世都市を体験したときの若き日の奥井の感激と驚きが私たちの胸に迫ってくる。ドイツ留学以前にラスキンをめぐって熱心に研究がおこなわれていたし、田園都市についても関心が向けられていたことは、奥井の研究歴からも明らかである。ラスキン研究は後年の都市研究の根底をなすものとして注目に価するが、ドイツ中世都市の体験と理解にあたって、ラスキンは隠れた力、重要なパースペクティヴとなっていたのである。この文章にはローテンブルクやネルトリンゲンなどの都市名は記されていないが、こうした都市

を含めて、奥井は数々のドイツ中世都市を目のあたりにして、ここにはコミュニティがある、ということをはっきりと自覚したのである。それはほとんど啓示に近いものだったといえるだろう。中世都市の景観に彼は凝縮された集団生活の形体を見たのである。奥井の目と心を射とめたのは、中世都市の形体と建築とプランだった。彼の視野に生活は形体として広がったのである。形体のうちに人びとの生活が生きていたのである。中世都市の姿と形、景観、風景によって、奥井はコミュニティとコミュニティ・ライフ、人びとの日常生活に導かれたのである。形体と生活から都市計画へ、さらに生活設計へ、こうした方向へも奥井の関心は深まっていったのである。眼光の人を形体と生活の人と呼ぶこともできるだろう。

『現代大都市論』（昭和15年・1940年）の著者は、絵どころ豊かな研究者であり、また、文学に広く心を開いていた一人の生活者だった。水彩画を描く楽しみがあった。ラスキンは絵画の人でもあったから、奥井はラスキンに親近感を抱いていたのかも知れない。しなやかな感性とものを見る楽しみと喜び、表現する楽しみは、奥井の資質ではないかと思われる。自分自身の生活歴と生活史、都市体験、読書体験が、都市研究において有力な視点とパースペクティブとなっていたのである。さまざまな文学作品、小説、いろいろなエッセーなどに都市理解のモチーフを見出すことができた人、奥井復太郎はそのような研究者である。文学作品は、エッセーとともに、都市と人間と生活を理解するための、かけがえのない源泉となっていたのである。

瀧太郎、万太郎、復太郎と思わず呼びたくなるくらいだ。東京の下町と山の手は、いずれも奥井にあっては視点とパースペクティブとなっていたのである。三田山上の慶應義塾で一時期、教壇に立ったこともある永井荷風は、奥井にとっては都市研究のうえでなかなか重要な人だった。奥井はなぜこうした作家、文学者たちに強い関心を抱いたのだろうか。それは土地柄、人柄、心柄（いずれも奥井の用語である）、生活の遠近と様相、生活者の気分と生活態度、地域の景観、土地の雰囲気などが、小説やエッセーなどに生き生きとした状態で表現されていたからである。こうした作品は都市研究のフィールドおよび舞台となっていたのである。生活者の生活感情と気分、土地や場所、地域や地区、界隈の景観と生活様相、生活環境の光景と雰囲気に奥井は注目していた。小説やエッセーはみごとな鏡となっていたのである。それぞれの地域や土地の景観は、人びとの暮らしや人間の存在様相に深く根ざした生活の光景にほかならなかったのである。

永井荷風の追悼講演会が三田山上の演説館で開かれたことがある。奥井復太郎は、当時、慶應義塾長の要職にあり、多忙を極めていたが、この日は一人の研究者として壇上に立ち、「荷風と東京」と題して、追悼講演をおこなったのである。このとき、奥井は、荷風の作

品、「日和下駄」、「冬の蠅」、「ちぢらし髪」、「つゆのあとさき」、「湊東綺譚」に言及している。

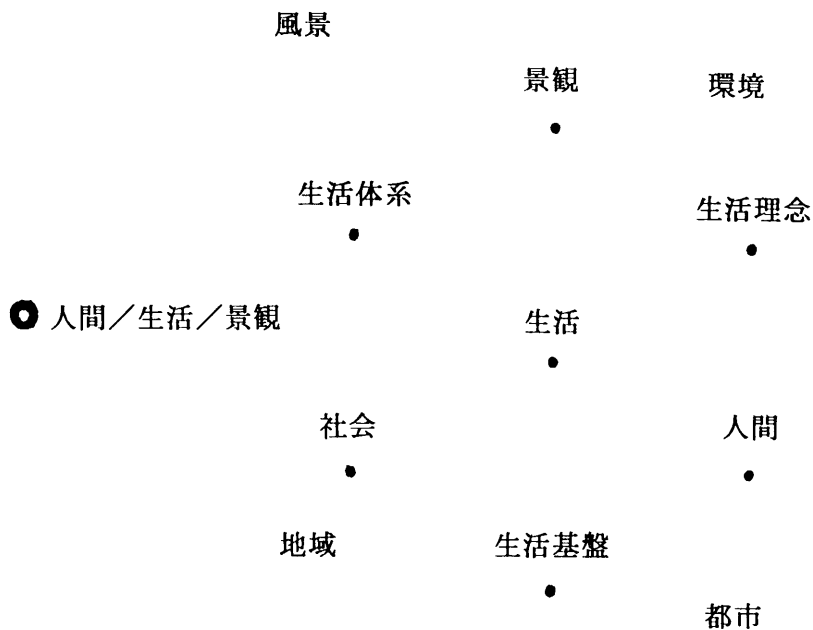
東京市内の景観の描写に見られる荷風の筆力、描写力に注目した奥井は、席上、つぎのように語っている（「荷風と東京—都市社会学の立場からみた荷風の作品—」『三田評論』584号昭和34年10月、25ページ—27ページ『奥井復太郎著作集第七巻』所収）。

と申しますのは、ただ風景が、いわゆる自然の風物というものが描けただけでは、都市の場合においては役に立たないのであります。その風景を描いていくところに、そこにおそらく生活しているであろう、あるいはその舞台でもって演ぜられるであろうところの庶民の生活、風俗あるいは喜怒哀楽といえますか、物の考え方、こういうものがそれと結びついて描き出されているところに、私が荷風のそういった方面の作風に感心するゆえんがあるのであります。単に地理的な情景の描写だけでなく、それに市民の生活、あるいは申せば庶民的生活というものが結びついている、この点なのであります。これは「日和下駄」もそうであります、戦後出ました「冬の蠅」というような随筆集を見ますと、東京の江東地区、隅田川の向うの地区の描写というものが実によく出ている。ただそれは低湿地でもってどうかこうとかというのじゃない。それに結びついている市民の生活のさまというものがよく描けているのであります。そういう意味におきまして、私どもは自分自身の研究の中でも、次に申します三つの事象に対して三位一体的な見方をしているのであります。具体的に一つの地域を与えてみます。これはわれわれの方ではエリアという言葉を使っている人もあるしクォーターという言葉を使っている人もある。あるいは地区というように訳している人もある。その一つの地域を与えてみますと、そこにおのずから生活するところの市民の生活の一集団があります。その集団というものはその集団特有の経済度を持ち、それからメンタリティを持つ。あるいは行動もそれ特有の型を持っております。そうしてそれらのものから、おのずからそこに作り上げられる、生まれ出て参りますところの風物、情景というものも他の生活とは違ったものになっている。従って景観と人間の集団生活とそれからその人間のパーソナリティ、この三つが三位一体の形をなすというのが都市社会学の研究の一つのテーマなのであります。（中略）

一つの間所があつてそこにばく然と人が生活しているというだけでなく、その土地柄と人柄と心柄、この三つが三位一体的に一つになっているというはっきりした社会調査上の結論があるわけなので、私がここで問題にしておりますのは、荷風がこういうところを、文学者としての、作家としての非常に鋭い洞察力といひますか、観察力で、そうして平々凡々にこれを描いていることであります。

生活環境としての地域や地区にはただならぬ深さが見られるのである。生活する人びと

に特有の生活意識、生活態度、生活感情、そうした人びとの行動のパターン、暮らしの姿、風俗や風物や風景を理解することによって、初めて特定の地域や地区の様相が明らかとなるのである。それぞれの土地や場所に漂い流れている雰囲気や霧のようなもの、その地域に特有の風（かぜ／ふう）がある。人びとの表情や言動や気風などにそれぞれの地域の様相や文化がうかがわれるのである。景観は並々ならぬものであり、地域や地区を理解するための注目に価する指標にはかならない。景観－和辻哲郎はそれを人間存在のなかの光景と呼んだが（『倫理学』）、奥井復太郎は景観を人間生活の営みの外的表現、各個人の社会的関係に於ける生活表現、また、生活と環境の外的統一と呼んだのである。（『奥井復太郎著作集』第五巻都市論（三）〔現代大都市論〕 監修 川合隆男／山岸 健／藤田弘夫、大空社、1996年7月27日、265 ページ、272 ページ）。



地域の様相を生活の場面で社会的な広がりによって都市へのアプローチを試みること－奥井復太郎の都市研究の方法とスタイルをこのように要約することができるだろう。『現代大都市論』に見られるのだが、奥井は、各地域に特殊な生活者と特殊な生活力、特殊な生活様式と理想の解明が必要であることを主張している。各地区には独自の生活様相と理想が見られるのであり、ここに独特の空気が醸成され、こうしてこの地区が別天地を構成するのである。奥井は地域の封鎖性、排他性、あるいは開放性に注目している。こうした地域の様相や居住者の行動型、心的状態（いずれも奥井の用語）の理解に

において、景観の社会学的意義（奥井）が生まれるのである。（『奥井復太郎著作集第五巻』260 ページ－261 ページ、参照）。景観の社会学が私たちの視野にクローズ・アップされてくる。つぎのような奥井の見解に注目したいと思う（同書、266 ページ）。

詳しく云へば、特定の景観及び其れ等の相互的交渉は特定の社会的、経済的、文化的関係及び構成に於いて規定されてをり、従って景観の描写または分析綜合は、之れを以って、其の内に含まれる社会的、文化的、経済的生活を指示するモメントになり得ると云ふ約束の下に、吾々は景観論を社会学的に取扱ふのである。

奥井は都市を社会的景観として理解しているが（『奥井復太郎著作集第五巻』105 ページ）、こうした理解を含めて、奥井においてはさまざまなパースペクティヴで都市へのアプローチが試みられていることに注目したい。彼は道路社会学をイメージしてもいる。途上風景（奥井）、さまざまな道の表情と様相が彼の視野に広がっている。奥井復太郎においては、都市景観は生活の風景であり、人間の風景なのである。こうした都市景観は、都市の生活像、人間像であり、都市の総合的理解の要となるものこそ、景観／風景にほかならない。眼光の人の都市研究は、彼自身の生活の形体（奥井の用語）、生活の風景として理解されるだろう。彼の視野は都市研究を越えた広がりでかなたへと延び広がっている。そうした視野を生活の地平と呼びたいと思う。このような地平に人間と風景が姿を見せているのである。

人間と生活、人間の生活、日常生活こそ、奥井復太郎の研究のモチーフであり、彼のパースペクティヴである。生活景観、社会的景観に彼の〈まなざし〉が注がれつづけていたのである。

文 献

監修 川合隆男／山岸 健／藤田弘夫、1996年『奥井復太郎著作集』全九巻、大空社。

山岸 健、1982年『社会学の文脈と位相 人間・生活・都市・芸術・服装・身体』慶應義塾大学出版会、所収、第2章 都市の生活と都市の構造（初出『三田学会雑誌』第58巻第11・12号 奥井復太郎博士追悼特集、慶應義塾経済学会、昭和40年12月）。

（やまざし たけし 慶應義塾大学文学部）